

連載
25

近畿日本鉄道・難波線

[近鉄難波～上本町]



万国博覧会の開幕当日に開通

近畿日本鉄道（近鉄）は、関西から東海にかけての2府3県に路線をもつ最も営業距離の長い民鉄として知られているが、「近鉄難波線」は「上本町」「近鉄日本橋」「近鉄難波」の3駅、路線距離わずか2km、大阪のコテコテ文化をギュッと凝縮した路線である。

近鉄の母体ともいえる大阪電気軌道は、生駒トンネルを難工事の末に完成させて大正3（1914）年に上本町―奈良間を開業させ、それ以来、鳥羽や賢島、名古屋などへのルートを整え、上本町駅は大阪の東の玄関口、創業以来のターミナル駅として発展してきた。

悲願だった上本町から大阪市内中心部への乗り入れは、昭和40（1965）年、万国博覧会関連の交通整備の一環として着工。万博開幕当日の昭和45（1970）年3月15日に「近鉄難波線」として開通した。万博に訪れた多くの人たちは、万博会場へのアクセス路線となった同線を利用し、奈良や伊勢志摩など豊富な近鉄沿線の名所旧跡にも足を向けたという。

市営バス停「上本町六丁目」は近鉄上本町駅前にある。大阪では地名を省略して呼ぶことが多く、日本橋一丁目は「日本一」（ボンイチとも）、天神橋六丁目は「天六」、近鉄上本町駅一帯を総称して「上六」と呼ぶのが習わしだ。

元和元年、冬の陣で焼け野原となった浪速の町の再建にあたった松平忠明（家康の外孫）は、太古は海だった大阪で唯一陸地といえる大

上六付近は浪速の歴史の散歩道。

阪城から四天王寺に至る上町台地を寺町とし、水害が多い船場や島之内の避難所にもあてた。高台の上六付近は風光明媚なために豪商の別荘、庭園、梅林、茶亭などで賑わったという。その名残で、上町筋を少し北にとった誓願寺には井原西鶴や私塾「懷徳堂」を設立した中井一族の墓があり、隣の谷町筋には堂島米会所など浪速三大市場をつくった淀屋が眠る大仙寺、久本寺には住友友以、近松門左衛門の墓石や人形浄瑠璃の竹本若太夫、忠臣蔵の原惣右衛門の寺など歴史の散歩道として整備されている。

ごった煮文化の大阪ミナミ・エリア

近鉄百貨店と二体になった上本町駅の地下ホームから、電車で2駅先の近鉄難波駅に向かう。全線地下であつという間に到着した。実質的には奈良線の延伸線であり、伊勢志摩や名古屋方面の特急列車の多くが発着している。「難波線」という名称自体あまり知られていない。地下鉄の御堂筋線、千日前線、四つ橋線、さらに南海電鉄とJR難波駅とも地下道でつながっているコンコースは人の波であふれかえっていた。「難波」は、古くは難波宮など「ナニワ」と呼んだが、この辺りは難波村の新開地だったことから「ナンバ」と呼ぶ。昔から大阪の中心で、一帯をゆったり散歩するだけで数日を要するといふ繁華街、ミナミ・エリアを形成している。

御堂筋に面した近鉄難波ビルの南側に建つ桃山風の「新歌舞伎座」から、芝居町道頓堀の



上方お笑いのメッカ、
なんばグランド花月。



派手な看板がぎっしりならぶ道頓堀の看板も
やっぱりにぎにぎしい。



文・島 実蔵 (ジャーナリスト・作家)

text by Zitsuzoh SHIMA

(社) 日本ペンクラブ会員、企業フォーラム会員。著書に『大坂堂島米会所物語』(時事通信社)、
『タイムスリップ in 浪華』(飛鳥書房) ほか。

写真・生田由美子

photographs by Yumiko IKUTA

松竹座や角座、さらになんばグラウンド花月やワツハ上方まで芸能コースは飽きることがない。西側の湊町リバープレイスを北に少し歩くと、カフェ&ファッションの堀江オレンジストリートになる。そこから御堂筋までが大坂を代表する若者の街、アメリカ村。小ささまざまなショップが軒を並べるが、買い物目的なら南船場や心齋橋筋での心ブラがおすすだし、御堂筋沿いはヴィトン、デイオール、シャネルなどが並ぶスーパー・ブランド・ストリートだ。

もちろん「食いだおれの町」だからグルメ・コースはいくつもあ。ド派手な看板が並ぶメインストリートの道頓堀をはじめ、とんぼりリバーウォーク(道頓堀川岸)をはさんだ南地五花街の宗右衛門町、法善寺横町に千日前、戎橋商店街に極楽商店街。フグやスッポンの高級料理からラーメンやカレーの庶民派料理、お好み焼きからたこ焼きまで何でもござれだ。

浪速らしいこった煮のどのスポットも徒歩圏内というコンパクトさが魅力だが、2009年完成予定の阪神電鉄西大阪線(阪神なんば線に改称予定)が難波駅に相互乗り入れするため、西宮から三宮、山陽電鉄の姫路までつながり、ますますミナミの東西の玄関駅になっていく。

浪速の歳時記・黒門市場

大阪では南北の道を原則「筋」と呼び、東西は「通り」と呼ぶ。御堂筋の難波駅から0.8km離れた堺筋の日本橋駅まで、千日前通りの地下街

何でもござれが楽しい、難波を歩く。

「なんばウォーク」をぶらりと歩いてみた。御堂筋より西の四つ橋筋から堺筋まで2400もの店舗があるから飽きることはない。ちょうど中間地点の千日前を左にとると織田作之助の小説「夫婦善哉」の舞台となった法善寺がある。山号を天竜山といい、千日念仏回向の興行から千日前が地名となった。

千日前通りと平行して流れる道頓堀川には14の橋があるが、そのなかで幕府が架けた唯一の公儀橋が堺筋の日本橋で、戦略の要衝「紀州街道」と結ぶ橋として、東京の日本橋と区別して「二ッポンバシ」と呼ぶ。

日本橋駅から上本町に向かつて3分も歩くと、日本で4番目の国立劇場「国立文楽劇場」がある。そこからさらに東に進むと古典落語「高津の富」の舞台として知られる高津宮がある。仁徳天皇が主祭だが、桂文枝の石碑を境内で見つけた。さくらの名所だ。

生玉さんと親しまれる生國魂神社いけくにたまじんじやをお参りして、旅の締めくくりに駅南の「黒門市場」に入った。むかし圓明寺えんめいじの黒い山門がここにあったことから黒門市場と呼ぶが、「中央市場にない品物も黒門にはある」といわれて、食のプロから主婦にまでナニワの台所として愛され、暮れの賑わいは大阪の風物詩として欠かせない。

黒門市場を南にぬけると西の秋葉原、日本橋電気街「でんでんタウン」になる。さらに南に歩を進めると大阪のシンボル通天閣が目に入ってきた。よし、旅の仕上げはビールと新世界名物の串カツでエネルギー補給といくか。



活気あるかけ声が飛びかう浪速の台所・黒門市場。



法善寺の境内にある「夫婦善哉」は明治16(1883)年創業の老舗。